

ESSAY いたずら

倉元 信行

21

酒 一 筋

「あなたはマージャンやってるのか、酒飲んでるんだか分らないなあ」と口の悪い俺んが言う。

その通りだから私は一言もない。
負けると悔しいし、懐にもひびくから、いい加減にやっている訳ではないのだが。

私も父に負けず酒好きである。
うまい酒を、いい盃に満たし、口に運んでまですぐ軽く含み、香りがいっぱい広がったところでグイッと呑む、あの気分は酒飲みだけが味わうことのできるものであろう。

神奈川県相模原市に住んでいたころ、お隣の町田市に東急百貨店が開店した。十数年前のことである。

この開店日に、志野のくい呑みを買った覚えがあるのだが、この1階のお酒売り場で“梅錦”というお酒と初めて出会った。

独特の甘みとコクを持った豊潤な味はそれまで私の知っている日本酒とは異質のものだった。

四国で、こんなうまい酒が造られているのかとびっくりした。

それからは自転車でこの酒を買いに行くのが楽しみとなった。前のカゴに一升瓶を2本入れて町田

から坂道を押して帰ってくる。品切れで空振りになることもあった。

十年ほど前に横浜の郊外に転居してからは、この酒にお目にかかれなくなった。近くの酒のスーパーなどのいろんな酒を試し、それなりにおいしいのだが、これで決まりというものになかなか出会わない。

“梅錦”を見つけたのは、東京へ転勤したため通過するようになった横浜駅のデパートである。

さっそく、その“酒一筋”という銘柄の一升瓶を抱いて帰った。

うまかった。十年前のあの味を思い出した。そして口に広がるその香りは、あの忙しかつ

た相模原時代の生活を想い出させた。三番目の娘が産まれたばかりで、仕事のほうでは国内外を飛びまわり、寮生とは“松が家”で大騒ぎしていたあの充実した時代を。

今は、相鉄線の電車で時々一升瓶を持ち帰っている。やはり品切れしていることもあるから、知る人ぞ知る酒なのであろう。

酒を飲んでの失敗は挙げればきりが無い。

新婚早々、アパートの前のドブに落ち、頭のとっぺんから足の先まで泥まみれになって、這うようにして帰ってきた時のことを言われると、私はただただ押し黙るだけである。何しろ私はそのことの記憶が全く無いのだから。

「そのまま寝て、死ななかつただけ良かったわよね」

全くそのとうりである。これは、酒のせいではない、私のせいである。

酒は人生に彩りを与えてくれた。

テニスを続けられたのは、ビールのうまさのおかげだったし、焼きものを始めたのも、くい呑みを求めたのがきっかけだった。酒好きでなかったらこれらの趣味に決して手をつけていなかったらだろう。

酒が好きだったことに私は感謝している。酒といつまでもいい友達でいたい。

